

元雜劇における尉遲敬德像の形成について

和泉 ひとみ

はじめに

隋唐の興亡をテーマにした通俗文學の作品には、『資治通鑑綱目』、『新唐書』等の史書の内容に、巷間の演劇や藝能に由来する民間の物語を足して作られた『唐書志傳』、もとはそうした民間の物語で構成されていたと思われる『大唐秦王詞話』、この二作品を含む、李世民や尉遲敬德を主要人物として、歴史を語ることに主眼をおく山西系の作品群、そして、秦叔寶、程咬金を主要人物として面白い話を提供しようとする態度が感じられる山東系の作品群など、様々なタイプがある。¹⁾

尉遲敬德(名は恭。敬德は字だが、通俗文學作品では字で行われることが少なくないため、本稿でも字で呼ぶことにする。)は、そうした作品群において、概ね太宗の腹心として、唐王朝成立に多大な貢献をする人物として描かれている。武勇や主君への忠誠心をもって賞賛される武將が数多く登場する中で、尉遲敬德が他の如何なる武將とも區別され、讀者に鮮烈な印象を與える所以は、鐵鞭を振り回して敵を死の淵に追いやる姿にある。(圖一) 鐵鞭を持つ尉遲敬德像は、通俗

文學の中では元雜劇に最も早く見られ、元代後期に刊行されたと推定される元刊本に含まれる「尉遲恭三奪槊(槊)」劇(以下、元刊「三奪槊」劇と呼ぶ。)に、既に認められる。通俗文學の作品中にみえる尉遲敬德に関する物語は、細部はともかく、概ね『舊唐書』、『新唐書』、『資治通鑑』といった正統的な史書に、その原型が記載されている。ところが、鐵鞭を持つ尉遲敬德の姿は、こうした正統的な史書には一切見られない。そのため、この元雜劇中の形象は、正史の系統とは異なった系統の傳承に基づいて作られたものであることが考えられる。本稿では、まず、この鐵鞭を持った尉遲像が唐代にまで遡り得ることを述べた上で、宋代を経て元雜劇の形象に至るまでの過程を追い、さらに、尉遲に賦與されている容貌、いでたちといった外見についても、その形成に關して若干の考察を加えることとしたい。

一、元刊「三奪槊」劇中の鐵鞭を持った尉遲敬德

議論に先驅けて、本節では元刊「三奪槊」劇の梗概を記すとともに、劇中で尉遲敬德が使っている鐵鞭の名稱と機能について整理しておく

元雜劇における尉遲敬德像の形成について

たい。

本作品は、讒言によって反逆の疑いをかけられた尉遲敬徳が、高祖の面前で齊王・李元吉と一騎打ちの決闘に挑み、その命を奪って恨みを晴らすという内容である。その梗概は、およそ次のようなものである。唐朝成立後、秦王・李世民的臺頭に危機感を抱いた皇太子・李建威と齊王は、高祖に美良川の戦い(唐に投降する以前、尉遲敬徳が唐側の武將である秦叔寶と争った戦い)を書いた繪を示し、尉遲敬徳を逆臣だと讒言する。讒言を容易に信用する高祖に憤った劉文靖は、榆科園の戦い(尉遲敬徳が王世充配下の單雄信を打ち負かして、李世民を救った戦い)を書いた繪を示し、高祖に直諫する。(以上、第一折)尉遲敬徳と一騎打ちの決戦をすることになった齊王は、戦略上のアドバースを求めて秦叔寶のもとを訪れるが、秦は尉遲のすさまじさを語り、決戦を取りやめにするよう忠告する。(以上、第二折)決戦前夜、讒言にはらわたが煮えくり返る思いの尉遲敬徳は、鬪志を漲らせ齊王に復讐することを誓う。(以上、第三折)決闘の當日、尉遲敬徳は齊王の架を奪い取った上、鐵鞭で齊王をめった打ちにして殺し、勝利をおさめる。(以上、第四折)

劇中、第三折「沈醉東風」曲に歌われるように、尉遲敬徳は弓矢や槍といった武器を使用したことになってはいるが、劇中で實際に過去の武勇が語られたり、齊王との決闘が描寫される場面では、鐵鞭のみが使われている。また、第一折の正末、劉文靖が歌う「金盞兒」には、「全憑着竹節鞭、生併了些草頭王。」(全て竹節鞭にたよって、王を騙る者どもをやった)とあり、尉遲の武勳が専ら竹節鞭によって立てられたものであるとされる。したがって、元刊「三奪槊」劇において、鐵鞭は既に尉遲敬徳のイメージを決定づける道具になっている

といえる。

なお、この鐵鞭は、元刊「三奪槊」劇第四折「笑和尚」では鐵鞭と呼ばれているが、前掲の第一折「金盞兒」では竹節鞭とあるほか、同じく第一折「醉扶歸」及び第二折「牧羊關」では虎眼鞭、また第三折「收江南」では水磨鞭、第四折「滾繡毬」では打將鞭などと呼ばれている。名稱は様々だが、これらがそれぞれ別々のものを指しているとは考えにくく、鐵製の鞭という武器の形状や機能を捉えて、異なった呼び方をしているものと思われる。

この鐵鞭の無氣味さと殺傷力は、劇中で繰り返し言及されており、尉遲敬徳の無敵のつわものぶりは、その人の武藝の熟達に據るものというよりは、鐵鞭に具わる機能に據るものであるかのような印象さえ受ける。次に引用するのは、第一折「尾」曲の一部である。

那鞭上常有半紙血糊塗的人腦漿。則那鞭則是鐵頭中取命的閻王。
若論高強。鞭着處便不死十分地也帶重傷。

(かの鞭には常にべつとりと血糊が付き、人の腦みそが塗りたくつてある。かの鞭こそは金剛神の鐵の頭をかち割って命を取る閻羅王。その強さを論ずるならば、鞭が当たった日には、たとえ死なずとも、十分に重傷を負う。)

引用文中の鐵頭については、「尉遲恭三奪槊」全譯校注(注3参照)に、『白兔記』第四齣「奉請西方五千五百五十五箇大金剛，都是鐵頭鐵腦鐵牙鐵齒鐵將軍，都到廟裏吃福鷄嚼福鷄。」を引き、金剛の鐵の頭をいうものとする。

さて、鐵鞭に血糊や腦みそが付いているさまは、グロテスクこの上

ない。このほか、第二折「隔尾」曲では、鐵鞭は白蛇や黒龍に喩えられており、やはり氣味の悪さを感じさせる。また、金剛神の硬い頭さえ割ってしまう閻羅王に喩えられているのは、その威力が常識を逸脱するほどすさまじいものであることを表現しており、当たれば死ぬか、さもなければ重傷を負うとされる部分とともに、百發百中の必殺の武器であることが示されている。こうした殺傷力については、第二折「隔尾」曲及び「烏夜啼」曲でも、鞭がそっと掠めただけでも齊王を朝まで怯えさせるとされたり、青あざが二〇年は消えないなどとされている。

鐵鞭を持った尉遲敬徳の姿は元刊「三奪槊」劇以降の作品にも引き継がれ、通俗文學作品の中では、尉遲は決まって鐵鞭をもち、そのトリードマークにもなっている。そのことは、元雜劇「小尉遲將軍將認父歸朝」（脈望館鈔校本『古今雜劇』及び『元曲選』所收）の尉遲保林（尉遲敬徳の生き別れになった息子という設定）も『水滸傳』（容與堂本）において、後述の呼延贊の末裔とされる呼延灼も、また病尉遲の綽名を持つ孫立も、鞭の名稱はともかく、鐵鞭を持っているところからも窺える。

二、唐代から宋初までの尉遲敬徳

前節で確認したように、元雜劇をはじめとする通俗文學の作品においては、鐵鞭は尉遲敬徳の武器として定着している。物語の展開は正統的な史書の内容に概ね沿っているにもかかわらず、鐵鞭だけは、こうした史書には見えないため、元代以降の現象のように思えるが、その傳承は意外にも古く、唐詩などにすでに見える。本節では唐詩のほか、元雜劇に先んずる文學作品及び資料によって、鐵鞭傳説の原型を

元雜劇における尉遲敬徳像の形成について

推定してみたい。

鞭が尉遲敬徳の所有物であったことがはっきりとわかる資料のうち、最も古いと思われるのは、李昌符「詠鐵馬鞭」并序（『全唐詩』九函第八冊）である。

鐵馬鞭，長慶二年義成軍節度使・曹華進獻。且曰：得之汗水。有字刻云，貞觀四年尉遲敬徳。字尚在。（鐵馬鞭は、長慶二年（八二二年）義成軍節度使、曹華進獻し、且つ曰く、之を汗水に得たりと。字有りて刻みて云ふ。貞觀四年（六三〇年）尉遲敬徳と。字は尚ほ在り。）

漢將臨流得鐵鞭，

鄂侯名字舊雕鏑。

須爲聖代無雙物，

肯逐將軍臥九泉。

汗馬不侵誅虜血，

神功今見補亡篇。

時來終薦明君用，

莫嘆沈埋二百年。

漢將流れに臨みて鐵鞭を得、

鄂侯の名字は雕鏑に舊りたり。

須く聖代無雙の物爲りて、

肯て將軍の九泉に臥すを逐ふべし。

汗馬は侵されず、虜を誅するの血に、

神功は今見る、亡を補ふの篇に。

時來たらば終に明君に薦めて用ひられん。

嘆く莫かれ、沈埋すること二百年と。

『唐詩紀事』卷七十（『四部叢刊』所收錢塘洪氏本）に據れば、李昌符は字を巖夢といい、咸通四年（八六三年）の進士で、官は尙書郎であつたといふ。

また、時代が降って乾寧間の人、黃滔の「祭南海南平王」文（『全唐文』卷八二六）では、南平王が優れた才覺で善政を布いたことを形容して次のようにいふ。

上榻則阮瑀，下賢則左車，從善則軾閭，宣威則斷案。故得越伏波之銅柱，獻款而來。感鄂公之鐵鞭，呈祥以見。（榻に上れば則ち阮瑀、賢に下れば則ち左車、善に従へば則ち軾閭し、威を宣ぶれば則ち案を斷つ。故に伏波の銅柱を越え、款を獻じて而して來たり、鄂公に感ずるの鐵鞭、祥を呈して以て見るを得たり。）

引用文中の軾閭とは、徳のある人物に對して敬意を表すこと（『呂氏春秋』期賢論）。また、伏波の銅柱は後漢の馬援がベトナムとの國境に銅柱を立てたことに基づく（『後漢書』馬援傳注、李賢が引く晉・顧微『廣州記』）。

『十國春秋』卷九十五（『四庫全書』所收本）に據れば、黃滔は字を文江といい、泉州、莆田の人である。乾寧二年（八九五年）の進士で、光化年間に四門博士を授けられている。宋になると、監察御史裏行を授かり、また威武軍節度推官になった。後梁の時代、有力な藩が多く皇帝と僭稱した際、太祖が閩の地を失うことなく、また黃滔自身が節度使であり續けたのは、黃氏が「規正有力」であつたためだと記される。「祭南海南平王」文は、題に「代閩王」と付されており、恐らくは閩王・王審知に代わつて黃滔が、廣州節度使であつた南平王・劉隱のために書いたものであらう。

以上の二種類の文獻によれば、尉遲敬徳の鐵鞭は、その、恐らくは忠義心に感銘を受けて、吉祥の證として忽然と姿を現し、尉遲が亡くなつた時にはその死に殉じたやうで、あたかも英雄の刀劍のやうである。ただ、これらに見える「鐵馬鞭」や「鐵鞭」が武器であつたとは限らない。特に鐵馬鞭については、名前そのものが馬用の鞭であることとを表している。

さらに時代が下り、宋の眞宗朝の人、田錫（字は表聖、嘉州洪雅の人、太平興國三年（九七八年）の進士）による「鄂公奪槊賦」（『咸平集』卷五、『四庫全書』所收本）でも、尉遲敬徳の持つ鞭は馬に用いられたものになっている。

尉遲敬徳の武勇を詠んだこの賦の約半分を占めるのは、『舊唐書』等の史書にも見える、高祖の面前で尉遲が齊王・元吉から槊を奪い取る逸話である。元刊「三奪槊」劇でも同じテーマで、第四折の一番の見せ場に尉遲、元吉の對決が配され、尉遲が元吉を殺してしまうが、この賦では史書の記載同様、尉遲が三度に涉つて元吉から槊を奪い取つて勝利をおさめるところで決戦の記述は終わっている。

この賦で注目されるのは、冒頭で尉遲敬徳の武人としての秀逸さと人望の厚さとが詠まれた後に、「揮鞭而馬疾如電，運槊而身輕若風。」という句がみえることである。これによれば、鐵製であるか否かはともかく、尉遲は鞭を持ち、それを揮えば馬が電光石火のごとく速く走つたことがわかる。『舊唐書』等において尉遲敬徳が馬を猛烈な速さで驅るのは、榆窠で單雄信の襲撃に遭つた秦王（のち太宗）を助ける場面と、玄武門の變の際、馬が木の枝に絡まって動きがとれない秦王が、齊王にあやうく殺されそうになつたところに駆けつける場面である。

このうち、前者は宋代の兵書にも記載があり、後には通俗文學にも取り入れられているところを見れば、かなり人口に膾炙していたものと考えられる。したがつて、賦のこの句は、尉遲のこの逸話を念頭において詠まれたものである可能性がある。なお、正統的な史書には鞭についての記述がないばかりか、尉遲が馬を驅つてかけつける場面でも、「躍馬」、「馳叱之」といった表現があるだけで、馬が異常な速さで走つたという記述は見當たらず、田錫がこうした史書以外の何かに基づい

て記したことが考えられる。こうしたことを考えれば、尉遲傳説の一部として、尉遲敬徳が楡窠での秦王の危機に際して、鞭を揮って馬を驚異的スピードで走らせ救い出した、という内容が想定できる。この傳説が李昌符詩、黃滔文の前提とする傳説と同じものである保證はないが、假にこれらが同一の傳説に基づく一連の流れの中に屬するものとすれば、馬を猛烈な速さで走らせる鞭は、尉遲に感銘を受けて生死をともにした鐵の鞭ということになる。

馬を驚異的なスピードで走らせる鐵鞭については、唐・皇甫枚『三水小牘』（『抱經堂叢書』所收本）に以下のような話を載せる。駿馬を手に入れた韋玘が、この馬を御すのに鐵鞭を使ったところ、馬は猛烈なスピードで走り停まらなかつた。酒に酔っていた玘は、耐え切れな
いと思ひ桑の木を通りすぎるときに、その高い枝に飛び移つた。馬は數十歩行き過ぎたところで引き返し、玘が降りてこないと見るや桑の木を齧りだした。恐れをなした玘は、隙をうかがって飛び降り、近くの井戸に飛び込んだが、馬も飛び込んで共に死んでしまった。このほか、『新五代史』安重榮傳には、叛亂を圖つた安が鐵鞭を献上させて、鞭には神通力があり、それが人を指せばその人は死ぬと言つて、民をたぶらかした逸話を載せる。こうした記事に據れば、鐵鞭には、早くから魔力ともいふべき一種の不可思議な力があると考えられていたことがわかる。

三、鐵鞭の武器化について

早い時期における尉遲敬徳の鐵鞭傳説が以上のようなものだったとすれば、元刊「三奪槩」劇に至るまでの過程で次に問題になるのは、馬用の鞭がなぜ武器になったのかという點である。これについては、

元雜劇における尉遲敬徳像の形成について

ひとえに鐵鞭が宋代には戰場で武器として使われていたという事實に、その理由があると考えられる。武器としての鞭を記録する文獻で、最も時期が早く信頼できるものは、仁宗皇帝の時代に編纂された曾公亮・丁度『武經總要』であろう。その前集に収録されている鐵鞭には、全面にわたって節があり、その別稱「竹節鞭」の名にふさわしい。(圖二) また、この鐵鞭が實際に武器として使われていたことも、『隆平集』卷十九、王珪が西夏・元昊軍と闘つた際の記述で確認できる。また、南宋に入つてからは、金軍との闘いでも使われており、『建炎以來繫年要錄』卷百九十七では、鈐轄の榮某が馬上で鐵鞭を揮つて敵を殺し、慘敗させたことが記されている。⁶⁵⁾

また『隆平集』卷十七には、『水滸傳』の中で呼延灼の祖先とされる呼延贊についての記事が記載されている。

呼延贊は并人なり。少くして鐵騎卒と爲る。太祖其の武力を愛で、擢んでられて軍校と爲る。屢、戰功を以て遷り、團練使卒に至る。(中略) 出入するに破陣刀、降魔杵、鐵鞭、鐵幟頭の兩角に刃有る有りて、皆十餘斤たり。騅馬に乗り、絳もて額を抹し、自ら尉遲敬徳を慕ふと謂ふ。⁶⁶⁾

ここで、呼延贊は兩端に刃がついた鐵の兜を被り、黒い馬に乗り、赤い鉢巻きを締めた上、破陣刀、降魔杵、そして鐵鞭を持っており、尉遲敬徳を敬慕したとされている。また、『事實類苑』卷五十七及び『錦繡萬花谷』前集卷十五にもほぼ同様の記述がある。これらとはともに『楊文公談苑』を引用しているが、絳抹額を緋抹額に作るほか、前者では鐵鞭は鞭に、騅馬は烏騅馬になっており、後者では、呼延贊が

小尉遲と自稱したことが記されている。さらに『宋史』呼延贊傳には、呼延贊が朝廷に召されて武藝を披露したとき「鞭を執りて馳騎し、鐵鞭、棗槊を揮いて廷中を旋繞すること數四」であった、とある。¹⁹⁾

これらに據れば、後周から宋初の交にすでに鐵鞭の武器化が生じていたとも考えられる。ただ、『隆平集』は曾鞏の著書とされるものの、『四庫全書總目提要』に據れば、偽書の可能性が濃厚であり、また、『楊文公談苑』の著者、楊億は太宗から眞宗にかけての時期の人だが、該書の執筆年代は不明である。『宋史』はさらに時代が下ってからの編纂であるため、こうした記事が呼延贊の實態に基づくものであるか否かは、やや疑わしい。²⁰⁾ よって、武器化の最も早い時期として文献で確認できるのは、やはり仁宗朝ということになる。

宋代における鐵鞭の武器化が、その後の通俗文學や民間藝能に影響したであろうことは、次のような現象によって推測できる。

仁宗朝の人、尹洙は「奏閱習短兵狀（代延帥作）」で、西夏との戦いにおける鐵鞭の機能を次のように述べる。

其の弓弩手更に槍刀を學ばず、各々劍一口を帶ぶと雖も、即ち元より係れ教習せず。又弓弩夏月に至る毎に、更に教閱せず。戰陣の時に當たりて、或いは險隘に遇へば、弓弩施爲するを得ず、須らく短兵を相持するを要すべし。其の弓弩手既にして短兵に會さずんば、手を束ねて害を受け、遂に多く敗覆す。臣今邊上に往き、逐處便ち一面して馬、歩軍を指揮し、弓弩を除く外、更に須らく刀劍及び鐵鞭、短槍の類を精學せしむべし。〔『河南先生文集』卷二〇、『四部叢刊』本〕²¹⁾

右の引用文では、險しく狹隘な山間部で弓弩が使用できない時には、

短兵、すなわち刀劍をはじめとする弓弩以外の武器を持つ兵士が必要だが、短兵部隊に合流できなければ、手を拱いて危害をうけることになるため、騎馬隊も歩兵隊も弓弩の外に、鐵鞭等に熟達させねばならぬという。山間部で弓弩が使えずに危害を受ける場合は、具體的に如何なる状況下で生じるものなのか審らかでないが、いずれにしろ、この文によれば、鐵鞭は刀劍や短槍とともに、本來は短兵よって山間の狹隘な地における戰鬪に用いられたものようである。²²⁾

鐵鞭のこうした環境下における使用は、二元雜劇「伍子胥鞭伏柳盜跖」（脈望館鈔校本『古今雜劇』所收本、以下「鞭伏盜跖」と呼ぶ。）において、伍子胥が盜跖を人目につかない山間の隘路に誘い込み、鞭で打擲して盜跖を調伏する場面を想起させる。

楚の平公の一行は、秦の穆公の招聘に應じて臨潼での鬪賣會に向かう途上、諸侯の寶を奪おうとする柳盜跖（展雄）の襲撃に遭った。少年將軍の伍子胥（正末）は點鋼槍を手にして盜跖と戦い、三度負けるふりをした後に盜跖を南山峪に誘い込むことに成功し、網（綱）鞭で盜跖を打擲して降参させたのだった。²³⁾（十八國臨潼鬪賣」劇（以下、「臨潼鬪賣」と呼ぶ。）では水磨鞭、鐵鞭とする。）伍子胥が盜跖を隘路に誘ったのは、盜賊の頭目としての面子を保ってやろうとしたためではあるが、その鞭の使用は、如何なる環境において鞭は使用されたかという点において、宋代の状況に合致する。この作品は、もともとは「臨潼鬪賣」劇の一部であったが、後にひとつの作品として獨立したものと考えられる。「臨潼鬪賣」にしろ「鞭伏盜跖」にしろ、荒唐無稽で史實とは全く關係がない。だが、虚構であるからこそ作品が作られた時代の事實が映し出されるともいえる。

尉遲敬徳が登場する雜劇の場合、二元刊「三奪槊」劇、「尉遲恭單鞭

奪槊」劇（脈望館鈔校本『古今雜劇』及び『元曲選』所收、以下、「單鞭奪槊」と呼ぶ。）で描かれる若しくは言及される戦闘のうち、『舊唐書』等の史書にもとづいている場面では、とりたてて戦地の狹隘さが述べられているわけではない。無論、歴史上、砦を築くような場所は、山間部の敵が攻めにくい土地ではあったろうが、美良川の戦いでも榆科園の戦いでも、その土地柄が特に問題にされているわけではない。

一方、雜劇の中には史書には全くみえない戦闘が存在する。「單鞭奪槊」劇の赤瓜峪の戦い、「敬徳不服老」劇（脈望館鈔校本『古今雜劇』所收）の牛口峪の戦い、「小尉遲」劇の尉遲保林との戦いがそれだが、このうち前者は劇中で言及されるだけで具體的な描写はなく、これらを描いた別の作品の存在が想定される。注意を引くのは、この二つの戦いがともに峪で行われていることである。赤瓜峪の戦いは、尉遲敬徳が唐に降るより以前に齊王・元吉と赤瓜峪で戦い、尉遲が齊王を鐵鞭でたたかき打ったかというもので、これを恨んで、齊王は唐に降った尉遲を陥れようとするのである。牛口峪の戦いは、尉遲が牛口峪で竇建徳を鞭で倒したというものである。このプロットは虚實相半ばするもので、尉遲敬徳が秦王・李世民に従って建徳を討伐する戦いに参加し大きな戦果を挙げたことは、『舊唐書』竇建徳傳をはじめとする史書に記されているが、牛口峪に逃げ込んだ建徳を討ち取り擒にしたのは、史書では白士讓、楊武威の二人であり、尉遲敬徳ではない。つまり、この雜劇のプロットは、事實が捻じ曲げられている上に、地名も渚から峪に改められているのである。

こうしたいくつかの劇中の設定は、宋代における軍隊の鐵鞭使用の實態を前提に考えられたものであるかのようであり、また、鐵鞭が武

器として定着していなければ、こうした設定にはならなかったはずである。

以上のように、宋・仁宗朝以降、鐵鞭が武器として実際の戦場で使用されるようになり、その事實が、晩唐から宋初にかけて知られていた尉遲敬徳の鐵（馬）鞭傳説と結びついたものと思われる。鐵鞭の變質に伴って、もとの鐵（馬）鞭傳説は忘れられていったために、後世にまで傳わらなかつたのだろう。だが一方で、本來の傳説は廢れても、恐らくは呼延贊逸話の媒介もあって、尉遲敬徳と鐵鞭の結びつきは定着したため、尉遲は強力兵器の鐵鞭を持つようになった。このため、鐵鞭の武器化以降、新たに創られた尉遲物語は、宋代の鐵鞭使用の實情に則った設定になっている。一方、『舊唐書』等の史書に記載される既存の物語においては、史書では他の武器を持っていた場面でも、一律に鐵鞭を持つことになり、物語に若干の變更さえ求められることになった。こうした傾向の見やすい例は、元刊「三奪槊」劇、「單鞭奪槊」劇の奪槊の場面である。史書では、この、高祖の御前で尉遲敬徳が得意の奪槊の藝を披露する話は、尉遲が齊王から三度、槊を奪い取って恨みを買うという記述で終わっているが、元雜劇では尉遲がさらに鐵鞭で齊王を打擲或いは打撲死させるのである。鐵鞭という武器を持った尉遲像が定着した後、勸善懲惡という枠組みの中で尉遲の益荒男ぶりを描寫することがテーマの元雜劇において、より印象的で首尾一貫した形象を作りあげるという意味でも、こうした改變は必要であつたのだろう。

四、尉遲敬徳の外見について——道教神への接近

前節までに尉遲敬徳が鐵鞭を武器とするようになった過程を述べた。鐵鞭が、尉遲の武將としての形象を形成するのに最も重要な役割を果たしていることは確かだが、その服装や容貌もまた特異であり、獨特の形象を成す一因となっている。次に元刊「三奪槩」劇から二曲を引用し、その姿を確認したい。

交我忍不住微ヌ(微)地笑、我迭不得把你慢ヌ(慢)地交(教)。
來日你若《見》那鐵幙頭紅抹額。烏油甲皂羅袍。敢交你就較心里驚倒。
(くすくす笑いを禁じ得ない。ゆるゆる教え申す暇はない。明日、あの鐵兜、赤はちまきに黒光りの鎧、黒羅の直垂をご覽になれば、きつと馬上で驚きのあまり卒倒されるはず。)——第二折「哭皇天」——

我則見皂羅袍都略(掠)濕宮花露。深烏馬冲開綠柳烟、殺氣盤旋。
(黒羅の直垂は宮中の花露に濡れ、黒馬が煙る柳の緑を突っ切れば、殺氣が漲る。)——第四折「滾繡毬」——

これらの曲において、尉遲敬徳は鐵兜(鐵幙頭)、赤いはちまき(紅抹額)、黒い鎧(烏油甲)、黒い直垂(皂羅袍)といったもの身につけており、全身黒盡くめであるばかりか、騎乗している馬までも黒である。このうち、鐵幙頭、紅抹額、深烏馬については、前掲『隆平集』の呼延贊にも共通している。馬については、後述するように道教神とのつながりが認められるが、前二者は『事物紀原』卷三、卷九

に、それぞれ記載があり、宋代においては軍装であったことがわかる。呼延贊の場合、體中に刺青があったこともあり、その服飾や武器の奇異なさまは、自他共に認めるところであったため、標準的な軍装とは言いがたい。とはいえ、その姿に武將を象徴する以外の特別な意味合いが、はっきり認められるわけではない。

一方、元雜劇の尉遲敬徳は、鐵幙頭などに加えて烏油甲、皂羅袍を身につけており、呼延贊よりも一層、徹底した黒装束といえる。このうち、皂羅袍は、道教神を連想させるものであり、鐵鞭と相俟って、明以降、尉遲敬徳像の道教神への接近を齎す要因となったと考えられる。以下、この點について述べたい。

次に引用するのは、「單鞭奪槩」劇第四折に見える詩である。

他是那虎體英雄將相才、

奴はかの堂々たる體軀を持つ英雄にして將相の才、

六韜三略在胸懷。

六韜三略を心得る。

遇敵只把單鞭舉、

敵に遇へば只だ單鞭を把りて舉げ、

救難荒騎刺馬來。

難を救はんとして荒き裸馬に乗り駆けつける。

捉將似鷹掣狡兔、

將を捉ふること鷹の狡兔を掣捕するが似く、

挾人如抱小嬰孩。

人を扶くこと幼き嬰兒を抱くが如し。

有如眞武臨凡世、

眞武の凡世に臨むが如き有りて、

便似黒(殺)天蓬下界來。

便ち黒殺、天蓬の下界して來たるが似し。

(「元曲選」本では、八句めを「便應黒煞下天臺」に作る。)

この詩は、前述の楡科園で尉遲敬徳が李世民の救援に駆けつけたこ

とに關連して、尉遲の活躍を聞いた徐茂公が、尉遲の猛者ぶりに感嘆して唱えたものである。

ここで尉遲は、眞武神、黒殺神、天蓬神のようだと言われている。このうち、黒殺神は明代の小説や、古くから傳わる民間傳承でも尉遲敬徳の形容に使われているので、とりわけ重要である。眞武神は、もと玄武神と言われたが、『雲麓漫鈔』巻九に據れば、宋の大中祥符年間には太祖の諱を避けて眞武とされたもので、北方の護法神である。天蓬神は、猪八戒がもともと天上ではそれであったとされる神であり、磯部彰『西遊記』形成史の研究』第八章「猪八戒の形成とその發展」(一九九三年、創文社)に、やはり北方の護法神であったことが詳細に紹介されている。眞武神、天蓬神ともにザンバラ髪に黒い衣服を身につけているほか、眞武の方は従者が黒い旗を持っている。また、天蓬の方も『三國志通俗演義』巻二十一に據れば、北斗七星が描かれた黒い幡を持っていたようである。黒殺神は、『事實類苑』巻四十六が引く『楊文公談苑』に「玄武、天蓬等と列して天の三大將爲り」といい、眞宗が塑像を作るために請ったところ、黒殺神は自らの容姿を形容して「我は人の形にして怒目披髮、龍に騎り劍を按え、前のかた一星を指す。」といったとある。これらの道教神は、それぞれ部分的に尉遲敬徳のいでたちを思わせるが、この段階では鐵鞭を持っているわけではない。

そこで、鐵鞭を持っている道教神を探せば、『北方眞武祖師玄天上帝出身志傳』『祖師下凡收黒氣』『古本小説集成』所收明刊本)の黒殺神にそれを見出すことができる。眞武神が下界での試練を経た後に天界に戻り、さらに各地の邪氣を治めていくこの小説で、黒面山王と自稱する黒殺神は、姓は趙、名を公明、號を文朗とされている。趙公

元雜劇における尉遲敬徳像の形成について

明は鐵鞭を武器としており、眞武神に調伏された後、その配下となり、各地を巡って邪氣を退治する。

こうした趙公明の姿は、元代に編纂された『新編連相搜神廣記』後集、趙元帥(建安版、『三教源流搜神大全』)所收、一九九〇年、上海古籍出版社)にまで遡ることができる。

其服色、頭戴鐵冠、手執鐵鞭者、金蓮水炷也。面色黑而胡須者、北炷也。跨虎者、金象也。(其の服色。頭に鐵冠を戴き、手に鐵鞭を執る者は、金の水炷に違ふなり。面色黒くして胡須ある者は、北炷なり。虎に跨る者は、金象なり。)

これに據れば、趙公明は黒い顔、鐵鞭のほか、鐵の冠を被り顔には髭を生やし、さらに虎に跨っているとされる。この虎は、恐らくは黒い虎であろう。澤田瑞穂『中國の民間信仰』第二章「異神の源流」黒神源流(一九八二年、工作舎)では、明・陸粲『庚巳編』、清・褚人穫『堅瓠廣集』を引用して、玄壇神(異説もあるが、商人の間では趙元帥だとされている。)の使役する神獸が黒い虎であったことが紹介されている。また、前掲『北方眞武祖師玄上帝出身志傳』では、趙公明配下の部將・黒虎神は、眞武神に調伏された後、趙公明に従って各地を巡ったとある。また、『封神演義』第四十六回では、趙公明が黒い虎をねじ伏せて自分の乗り物にしている。

以上のように、黒殺神・趙公明は鐵の冠、鐵鞭、黒い猛獸と尉遲敬徳の外見と共通するところが多い。趙公明はなぜか黒裝束ではないが、この姿に前述の眞武神、天蓬神の黒い服を付け加えれば、元雜劇の尉遲の姿に重なってくる。

ところで、趙公明は黒い顔に髭を生やしているとされている。髭は道教神の特徴であるが、明代の小説に描かれる尉遲敬徳もまた、黒い顔と髭をその形象として與えられており、元雜劇よりも、さらに道教神に接近した姿になっている。

『大唐秦王詞話』第二十一回（『古本小説集成』所收明刊本）

尉遲名恭字敬徳、熊腰虎背少人倫。身長一丈金剛像、胸闊三停太歲形。面貌宛如鍋底黒、髭鬚倒豎似剛針。（尉遲名は恭、字は敬徳、熊腰虎背にして倫たる人少なし。身長は一丈にして金剛の像、胸は闊きこと三停にして太歳の形たり。面貌は宛も鍋底の黒きが如く、髭鬚は倒豎すること剛針に似たり。）

『唐書志傳』第三十節（『古本小説叢刊』所收世徳堂刊本）

言未畢、一將湧身而出。面如鐵色、虎鬚環眼。（言い終わらぬうち、一人の將軍がぬつと現れた。その顔は鐵のような色、口髭に丸い目玉。）

『唐書志傳』にいう鐵のような色の顔については、『續湘山野録』

（『學津討源』所收本）に記載する、長安で將軍の職にあった杜祁公のもとに、黒い顔をして髭を生やし、堂々たる體軀だが凡庸な張という男が現れて、名刺がわりに「長安有客面如鐵」と書かれた詩を持参した、という記事が参考になる。これに據れば、鐵のような顔とは、黒い顔のことをいうものということになる。

おわりに

鐵鞭で馬を驅る唐代の尉遲敬徳像が、宋代に生じた鐵鞭の武器化によって、元雜劇では鐵鞭を武器とする形象へと變化し、それとともに民間信仰の神々の形象も取り込まれる傾向が生じた。さらに、明代では、元雜劇よりもさらに一步進んで、道教神との接近が顯著になった。尉遲像は、唐代から明代まで以上のような變遷を辿ったと考えられるが、ひとり鐵鞭のみは、用途が變わったとはいえ、一貫して尉遲敬徳の所有物であり續けた。この事實は、鐵鞭が人物形象の形成と變遷にとって、いかに重要であつたかを示唆している。最後に、この點を確認して、結びとしたい。

まず、既に引用したいくつかの作品において、尉遲敬徳像の特異性は、明らかに鐵鞭に依存している。第二節で引用した李昌符詩、黃滔文では、ともに鐵鞭が英雄の刀劍のように、尉遲敬徳と命運をともしたようであることは、既にのべたとおりである。もちろん、尉遲敬徳がそれを所有するに足る英雄であればこそ、鐵鞭は尉遲に付き従つたにちがいないが、一方、二作品の、「須らく聖代無雙の物爲りて」、「祥を呈して以て見る」といった表現からは、鐵鞭そのものに、他とは一線を畫す特殊な力が備わっていたことが感じられる。そう考えれば、鐵鞭こそが尉遲敬徳という非凡な武將の能力を最大限に發揮させ、英雄たらしめたのだ、という見方も可能であろう。また、元刊「三奪槩」劇では、第一節で確認したように、すでに武器化した鐵鞭の殺傷力や無氣味が描寫されている。劇中には、尉遲敬徳その人の武將としての能力の高さが描寫されていないわけではないが、鐵鞭の描寫が、より具體的で且つ繰り返されているのに比べれば、明らかにその言及

の度合いは少ない。その点においては、唐の鐵鞭傳説の方向性と軌を一にしているといえる。

さらに、第四節で述べた、明代の小説に顯著に見られる道教神への接近、とりわけ、黒殺神・趙公明との同一化も、鐵鞭なしには生じなかつた現象だと考えられる。「單鞭奪槊」劇の尉遲敬徳は、確かに黒殺神や玄武神、天蓬神のようだといわれているが、この段階では、髭が風貌の特徴として擧げられているわけではなく、道教神の名は單に比喩として用いられているにすぎない。ところが、明代の小説、わけでも『大唐秦王詞話』においては、尉遲敬徳が黒殺神であることが繰り返し述べられており、兩者の形象の共通化が定着していた、乃至、作者が定着を促そうと意圖していたことが窺われる。「單鞭奪槊」劇では三人の神が一樣に比喩の對象とされていたが、ここに至って黒殺神のみに絞られてきたのは、本稿で提示した資料を見る限り、元明間には黒殺神・趙公明の、鐵鞭を持ち邪氣を退治する姿が流布し、それが元雜劇の尉遲敬徳の姿に重なつたためと考えられる。黒裝束は玄武、天蓬神にも見られたが、鐵鞭を持つてゐるのは黒殺神・趙公明のみである。鐵鞭が元雜劇において、英雄・尉遲敬徳のトレードマークであることを考えれば、黒殺神だけが尉遲と同一化していったのは、必然的な流れであつたといえる。

注

- (1) 小松謙『中國歴史小説研究』第五章『唐書志傳』『隋唐兩朝史傳』『大唐秦王詞話』『隋史遺文』『隋唐演義』『說唐全傳』—平話の存在しない時代を扱う歴史小説の展開—(平成十三年、汲古書院) 参照。

元雜劇における尉遲敬徳像の形成について

(2) 『舊唐書』では、劉文靖は劉文靜、楡科園は楡葉となつてゐる。

(3) 本稿では、元刊『三奪槊』劇の底本として、『元刊雜劇三十種』(古本戲曲叢刊)第四集所收)を使用した。校勘については、赤松紀彦等『元刊雜劇研究(一)』(『尉遲恭三奪槊』全譯校注)(『京都府立大學學術報告』「人文・社會」第五十六號、二〇〇四年、京都府立大學學術報告委員會)に、全面的に従つた。「沈醉東風」曲の該當部分は以下のとおり。我也曾箭(厮)射疊着面門。刀厮劈咬着牙根。也曾殺的槍桿上濕漉漉(漉)血未乾。馬頭前古鹿又(鹿)人頭滾。(〇)は底本の脱落を補つたもの、〇は直前の文字の訂正を表す。なお、本劇の第四折「滾繡毬」曲には、「我身上不曾掛凱(鎧)甲、腰間不曾帶弓箭。手中不曾將着六沈槍撚。我則是赤手空拳。我坐下刺騎着追風馬、劍(腕)上只颺着打將鞭。」とあり、弓矢や槍を持たず、徒手空拳だと言いつつ、鞭は持っているため、鞭は必ずしも弓矢や槍と同列の武器であつたとは言いがたい。しかし、劇中では、その殺傷力が描寫され、明らかに武器と認識されている。

(4) 該當部分は以下のとおり。「笑和尚」味又(味)這鐵鞭。「醉扶歸」把一條虎眼鞭直攪頭直上。「牧羊關」它滴溜着虎眼鞭。「收江南」水磨鞭來日再開軍。「滾繡毬」劍(腕)上只颺着打將鞭。

(5) 翻譯にあたっては、前掲『元刊雜劇研究(一)』(『尉遲恭三奪槊』全譯校注)を參考にした。

(6) 該當部分は以下のとおり。第二折「隔尾」那鞭却似一條玉莽(蟒)生鱗角。便是半截烏龍去了牙爪。那鞭着遠望了吸又(吸)地腦門上跳。那鞭休道十分的正着。則若輕又(輕)地抹着。敢交你睡夢里驚急列地怕道(到)曉。「烏夜啼」雖是沒傷損難貼金瘡藥。敢二十年青腫難消。

(7) 「小尉遲」劇、第一折には、劉無敵こと尉遲保林(『舊唐書』尉遲敬徳傳では寶琳に作る。)に正末・宇文慶が、尉遲敬徳から預かつていた水磨鞭ほか武具一式を渡す場面がある。(正末云：你父親臨行時、留下一

副披挂、在我處收着哩、是一條水磨鞭、一頂鐵幘頭、一副烏油甲、皂羅袍。『水滸傳』第五十五回：病尉遲孫立是交角鉄幘頭、大紅羅抹額、百花點翠皂羅袍、烏油鉄金甲、騎一疋烏騾馬、使一條竹節虎眼鞭、賽過尉遲恭。這呼延灼却是冲天角鉄幘頭、銷金黃羅抹額、七星打釘皂羅袍、烏油對嵌鐵甲、騎一疋御賜踢雪烏騾、使兩條水磨八稜鋼鞭、左手的重十二斤、右手重十三斤。

(8) 史書では、通俗文學作品の中で尉遲敬徳が鐵鞭を用いている場面、槊や弓矢、槍などを用いたことになっている。例えば、楡科園で、尉遲が單雄信を鞭で打ちのめした場面は、『舊唐書』尉遲敬徳傳（『四部備要』本）には、「世充驍將軍雄信領騎直趨太宗。敬徳躍馬大呼、橫刺雄信墜馬。」とあり、槍か槊といったもので刺したようである。

(9) 該當部分は次のとおり。昌符、字巖夢、登咸通四年進士第、歷尚書郎。該當部分は次のとおり。黃滔、字文江、泉州莆田人。唐乾寧二年、崔凝知貢舉、得及第進士張貽憲等二十五人。昭宗覆試于武徳殿、黜落者甚衆、而滔被留。光化中除四門博士。天覆元年、受太祖辟以監察御史裏行。充威武節度推官。旋使錢塘、與羅隱相得甚歡。梁時、強藩多僭位稱帝。太祖據有全閩、而終其身爲節度者、滔規正有力焉。王審知については『新五代史』閩王世家、劉隱については『舊五代史』梁書四参照。

(11) 英雄が死に臨んで劍を水中に投ずる話が世界各地にあること、中國では『花關索傳』の關羽に同様の話があり、その息子の關索、また孫悟空も水中から武器を得ていることが、金文京「關羽の息子と孫悟空」上・下（一九八六年、『文學』六、九、岩波書店）に詳しく紹介されている。また、『太平廣記』卷八十の引く『北夢瑣言』（乾隆十八年天都黃氏石印本、『北夢瑣言』近本には記載なし）には、持ち主への忠誠を表すかのような鐵鞭の記事を載せる。：僞王蜀時巫山高唐觀道士黃萬戸……常持一鐵鞭療疾、不以財物介懷、然好與鄉人爭訟、州縣不之重也。戎州刺史文思輅亦有戲術……其鐵鞭爲文思輅收之。歸至涪州亡、其鞭而却歸黃矣。

(12) このほか、戎豆の詩にも「賦得鐵馬鞭」（『全唐詩』四函第十冊）がある。

(13) 曾公亮、丁度『武經總要』後集、絕藝（萬曆金陵書林唐富春本）には、尉遲が齊王から槊を三度奪いとった逸話と太宗を單雄信から救った逸話を載せる。尙、『武經總要』の存在は、全文東京都大學教授のご教示により知った。

(14) 該當部分は以下のとおり。京兆韋玘、小迥遙公之裔……馬有蹄鬣不可羈勒者、則市之。……玘乘之於衢曰：善。可著鞭矣。遂市之。日宴乘歸、御之鐵鞭。一僕以他馬從。既登東原、絕馳十餘里。僕不能及。復遺鐵鞭、馬逸不能止、迅越榛莽溝畎。而玘酒困力疲、度必難禁矣、馬方驟遁大桑下、玘遂躍上高枝中、以爲無害矣。馬突過數十步、復來桑下、噴目仰視玘、而長鳴躩地、少頃鬣其桑本。……桑本將半焉、玘懼、其桑之顛也遙望、其左數步外、有井、伺馬之休於茂草、乃跳下疾走投井中。纔至底、馬亦隨入、玘與馬俱殞焉。『新五代史』安重榮傳：（重榮）又使人爲大鐵鞭以獻、誑其民曰：鞭有神。指人、人輒死。號鐵鞭郎君。

(15) 該當部分は次のとおり。『隆平集』卷十九（南豐彭期七業堂刊本）一將以鎗直其胸、傷右臂。珪左手以杵碎其腦。一將復以鎗進、珪挾其鎗、運鐵鞭擊死之。虜驚、遂引去。『建炎以來繫年要錄』卷一九七（廣雅書局『史學叢書』本）鈴轄榮某乘駿馬、揮鐵鞭殺敵。所向風靡、衆從之。敵遂大敗潰去。

(16) 原文は以下のとおり。呼延贊、并人。少爲鐵騎卒。太祖愛其武力、擢爲軍校、屢以戰功遷至團練使卒。……出入有破陣刀、降魔杵、鐵鞭、鐵幘頭、兩角有刃、皆十餘斤。乘騾馬、絳抹額、自謂慕尉遲敬徳。

(17) 該當部分は次のとおり。『事實類苑』卷五十七（『四庫全書』本）：贊作破陣刀、降魔杵、鞭、鐵幘頭、兩旁有刃、皆重數十斤。烏騾馬、緋抹額、慕尉遲鄂公之爲人。『錦繡萬花谷』前集卷十五（嘉靖刊本）本朝呼延贊以武勇爲衛士。……嘗作破陣刀、降魔杵、鐵鞭、鐵幘頭、兩旁有刃

、皆重數十斤。乘驢馬，緋抹額，慕尉遲之爲人。自稱小尉遲。『宋史』呼延贊傳（『四部備要』本）：（呼延贊）嘗獻陣圖兵要及樹營砦之策，求領邊任。召見令之作武藝。贊具裝執鞭馳騎，揮鐵鞭、棗槊，旋繞廷中數四。

(18) 『四庫全書總目提要』卷五十史部、別史類『隆平集』二卷の項では、該書の記述が史書らしくないこと、曾鞏傳に書名が記載されていないこと等を理由に偽書であることを疑う。：別史類舊本題宋曾鞏撰。……其記載簡略瑣碎，頗不合史法。晁公『武讀書志』摘其記。『太平御覽』與『總類』爲兩書之誤，疑其非鞏所作。今考鞏本傳，不載此集。曾鞏作鞏行狀，及韓維撰鞏神道碑，臚述所著書甚備，亦無此集。據『玉海』，元豐四年七月，鞏充史館修撰。十一月，鞏上太祖總論，不稱上意。遂罷修五朝史。鞏在史館，首尾僅五月，不容遽撰此本以進。其出於依託，殆無疑義。

(19) 原文は以下のとおり。其弓弩手更不學槍刀，雖各帶劍一口，即元不係教習。又弓弩每至夏月，更不教閱。當戰陣之時，或遇險隘，弓弩施爲不得，須要短兵相持。其弓弩手既不識短兵，束手受害，遂多敗覆。臣今往邊上，逐處便一面指揮馬步軍，除弓弩外，更須精學刀劍及鐵鞭、短槍之類。

(20) 『宋史』兵志四、鄉兵一にみえる秦鳳路經略安撫使・何常の上奏文には、西夏軍には山間部に歩跋子と呼ばれる部隊があり、山の斜面や溪谷を歩くのを得意とし、山間の危險箇所での戦いで「撃刺」し襲撃する役割を果たしたという。「撃刺」というからには、この部隊は刀劍や槍を持つににちがいない。また、この上奏文では元豐年間劉昌祚等が靈州に赴いた際、險路を塞ぐ賊軍を、盾を手にした先鋒隊が潰滅させたと述べ、山間の狹隘な地で賊に遭ったら、まずは盾で賊を防ぎ、次に弓や弩で賊の先鋒隊を射れば、矢が無駄に發せられることがないという。こうしたことを考えれば、尹洙のいう、險峻の地で弓弩が使えない場合

元雜劇における尉遲敬德像の形成について

とは、或いは歩跋子のような兵が、刀劍などを持って襲撃してきた時を指すものかもしれない。逃げ場のない場所、敏捷な歩兵が大量に押し寄せてきた時、防衛にあたる者がいなければ、弓弩隊は矢をつがえる間に殺されてしまうだろう。

(21) 該當部分は以下のとおり。：（禿斯兒）非是我眞情要輸，你焉知大將機謀？（展雄作趕科）（唱）則要你將咱趕入山峪去，我心中有躊躇，誰如？……（聖藥王）則見他意轉怒，我却也全不懼。（帶云）到南山峪口也。……（正末云）着你見某手段。（唱）見鋼刀飛起半空虛。（帶云）着去。（正末做放過刀，舉鞭打展雄落馬科）（唱）把這厮鞭打下山峪。

(22) 赤瓜峪の戦いは「單鞭奪槊」劇第二折の元吉の臺詞で言及される。：（元吉云）想當此一日，在赤瓜峪，我與敬德交戰時，他曾打我一鞭，打的我吐血。また、牛口峪の戦いについては「不伏老」劇、末（尉遲敬德）の「耍三臺」曲で、鴨綠江の戦いが過去の戦闘とは比べものならぬほどたやすいことを唱う中で「小可如牛口峪鞭伏了竇建德。」という。なお、『大唐秦王詞話』二十四回には、若干、内容が異なるが、赤瓜峪の戦いを描いた場面がある。

(23) 『舊唐書』竇建德傳（『四部備要』本）：建德中槍，竄於牛口渚，車騎將軍白士讓、楊武威生獲之。

(24) 『事物紀原』卷三（正徳刊本）：『二儀實錄』曰：古以皂羅三尺裏頭號頭巾。三代皆冠列品，黔首以皂絹裹髮，亦爲軍戎之服。後周武帝依周三尺裁爲幘頭，此得名之始也。……五代末梁高祖始布漆於紗，施鐵爲脚，作今樣也。『同書』卷九：『二儀實錄』曰：禹娶塗山之夕，大風電（雷）電中，有甲卒千人。其不被甲者以紅綃帕抹額云：海神來朝。禹問之，對曰：此武士之首服也。秦始皇至海上，有神朝皆抹額，緋衫大口袴。侍衛自此抹額，遂爲軍容之服。

(25) 『隆平集』卷十七には以下のような記述がある。：贊忠實有勇，偏體文以赤心殺賊字。……常（嘗）刺保州，請於上曰：臣服飾奇異，願救郡

縣清道。太宗笑而不答。又請續形鄭州靈顯王廟，願統陰兵滅虜。太宗常謂近臣曰：贊服器詭異，朕屢欲誅之。

- (26) 『大唐秦王詞話』には、卷一に「黑殺神尉遲恭絕滅煙塵。」とあるほか、隨所で黑殺神であることに言及している。また、江蘇・六合縣に傳わる洪山香火神會の神書のうち、唐儼では「秦叔寶是天蓬帥，尉遲恭是黑殺神。」と言われる。(黃文虎『江蘇六合縣馬鞍鄉五星村宋莊及馬集鎮尖山村宏營漢人的家譜香火神會』、『民俗曲藝叢書』所收、一九九六年、施合鄭基金會)

- (27) 宋・趙彥衛『雲麓漫鈔』卷九(『涉聞梓舊』所收) 朱雀、元(玄)武、青龍、白虎爲四方之神。祥符間避聖祖諱，始改元(玄)武爲眞武。……後興禮泉觀，得龜蛇。道士以爲眞武現，繪其像爲北方之神。被髮黑衣，仗劍蹈龜蛇，從者執黑旗。『三國志通俗演義』卷二十一「諸葛亮五出祁山」(『古本小說集成』所收) 孔明又令三萬軍皆執鎌刀馱繩，伺候割麥。却選二十四個精壯之士，各穿皂衣，披髮跣足，仗劍簇擁四輪車，爲推車使者。令關興結束做天蓬模樣，手執七星皂幡，步行在車前。孔明端坐於上，望魏營而來。『事實類苑』卷四十六、黑殺將軍：眞宗即位，築宮於山陰。將塑像，請於神。神曰：我人形，怒目披髮，騎龍按劍，指一星。

- (28) 該當部分は以下のとおり。祖師曰：何邪聚有此氣？上清曰：此氣乃是黑采神在世間作鬧。自稱爲黑面山王。……采神自己姓趙、名公明、號作文朗。……趙公明聞言大怒，手持鐵鞭，望祖師便打。

- (29) 該當部分は以下のとおり。『北方眞武祖師玄天上帝出身傳』「祖師遇着金刀難」：却說上界黑虎神，乃是趙公明部將，見主不在，亦變作一個少年女子下界。『封神演義』第四十六回(『明清善本小說叢刊』所收、新刻鍾伯敬先生批評本) 話說趙公明見一黑虎而來，喜不自勝。……正用得着你。掉步向前，將二指伏虎在地，用系(絲)縲套住虎項，跨在虎背上，把虎頭一拍，用符印一道畫在虎項上。

- (30) 該當部分は以下のとおり。既而一庸生張(忘其名)，亦堂堂人。帽髯

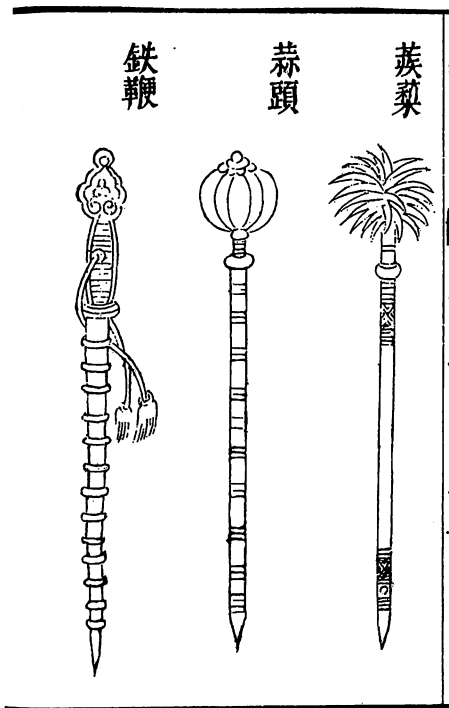
黑面，頂青巾縲裘，持一詩代刺。搖袖以謁杜公曰：昨夜雲中羽檄來，按兵誰解掃氛埃。長安有客面如鐵，爲報君王早築臺。

- (31) 本文で言及したほか、鐵鞭は南宋になると、閻羅王や神將が懲罰を與える刑具として使用するものと考えられるようになったらしい。(劉克莊「聽蛙方君作八老詩效韻各賦一首」：「老吏詩に「祇恐閻羅難抹過，鐵鞭它日鬼髻紅。」という句が見える。また、『夷堅志』支戊卷第五には、天心法を善くした任道元が、官位を得て出仕して以降、信仰の道をおろそかにしたため、夢の中で神將に鐵鞭で打たれたという記事が見える。) 趙公明が鐵鞭を持っているのは、或いはこうした鐵鞭の機能に據るものなかもしれないが、詳細はわからない。また、尉遲敬德には、鐵鞭に關する傳説のほかにも、いくつかの傳説があったと考えられる。ひとつは、突厥との戦いについてのもので、中唐にはこれを題材にした芝居があった(『封氏聞見記』卷六、道祭)。いまひとつは『西遊記』に端を發すると思われる門神傳説である。(泉州、開元寺の『西遊記』を描いたレリーフには、斧狀の武器を持つ尉遲敬德が含まれている。) しかし、これらが、鐵鞭傳説と如何なる關係になっているのかについては、はっきりしない。

〔附記〕

本稿は二〇〇五年「日本中國學會」第五十七回大會で口頭發表した内容をもとに作成しました。口頭發表の折には司會の勞をとって下さった金文京都大學教授をはじめ、多くの方々が大變貴重な意見を頂戴致しました。ここに記して感謝の意を表します。

元雜劇における尉遲敬德像の形成について



圖二、『武經總要』前集・器圖
(萬曆金陵書林唐富春本)



圖一、『唐書志傳』卷三、三十節 (世徳堂刊本)